

### 第三百十三話 自己犠牲のヒロイズム！

世界各国の軍隊では「自己犠牲のヒーロー」の話題に事欠かない。戦場において、自己の命を犠牲にしてまでも戦友であったり部隊を救った自己犠牲に対する称賛は永遠に語り継がれている。アニメの世界でも自己犠牲のヒーローは読者の胸を打つ。それほど、自己犠牲は、日本人の心情に訴えるものがあるのだ。組織的に（異論があろうが・・・）特攻が行われる以前においても日本陸・海軍には指揮官を先頭に突入した決死の事例が、多数残されている。

#### 1 日本軍における決死（必死）的攻撃事例



日露戦争における白樺隊、第一次上海事変での爆弾三勇士、真珠湾攻撃における特殊潜航艇、アンダマン諸島に向かう陸軍輸送船護衛中の26戦隊石川曹長の「隼」による米潜水艦の魚雷を阻止せんと敢行した突入爆破

(1944/4/14)、ビアク島襲来に際して、ラバウル航空隊5戦隊長の高田少佐が、独断4機を率いての敵艦船に対して敢行した自爆攻撃(1944/5/27)、B-29の八幡空襲に際して迎撃した4戦隊の野辺軍曹、高木伍長が敢行した体当たり(1944/8/20)等があり、陸軍は高田少佐の自爆攻撃を「特攻の魁」としている。海軍では、台湾沖航空戦で、26航空戦隊司令官の有馬正文少将(海兵43期、鹿児島)が、一番機に乗り込み、機上から全軍突撃を下し敵空母群に肉薄して自爆(1944/10/15)した。海軍ではこの有馬少将の壮挙を特攻の始まりとしている。以下wikiの記事による。『1944年10月15日に、幹部を集め、「これからは敵空母を沈めるためには、体当たり攻撃が必要です。そのためには若い士官や兵隊だけを死なせるわけにはいきません」と特攻を行うなら上級指揮官が搭乗すべきだと、志願者を募ったが集まった幹部は誰一人名乗りを上げなかった。するとそれまでの温厚な口調を一転し、「誰もおらんのか！よし、それなら私が乗ろう」と怒鳴ると、参謀や副官が止めるのも聞かず司令自ら一式陸攻に搭乗した。自ら出撃したのは有馬少将が常日頃から「司令官以下全員が体当たりでいかねば駄目である」「戦争は老人から死ぬべきだ」と言っており、一身を犠牲にして手本を示そうとしたためと言われる。有馬少将は出撃時に軍服から少将の襟章を取り外し、双眼鏡に刻印されていた『司令官』という文字を削り取っており、元々生還する気はなかった。特攻できたのかどうかについては異論もあり、米軍の記録には有馬機による被害報告はない。また、有馬機が敵艦に突入したところを目撃した僚機もない。(中略)・・・その後の特攻へ踏み切る動機となった』という。』

#### 2 独の「突撃戦闘機隊」構想

独空軍においては、連合軍の戦略爆撃に対抗するために日本軍が敢行した「体当たり戦法」方式を採用せず、体当たりの気概を持ちつつ、徹底的に敵機に接近して必殺の一撃を加え、この際機体等が損傷すれば体当たりをして、乗員は落下傘脱出するとの「突撃戦闘機隊」構想を具現化した。このために特別仕様の機体が準備された。

自死を罪とするキリスト教文化圏と大義に殉ずることを容認し「美」すら感じる大和民族の文化との差を感じてしまうのだが・・・

#### 3 組織的特攻に移行

陸軍は、1944年9月28日の「大本営陸軍部関係幕僚会議」で結論を得て、航空本部に航空特攻実施に関する大本営指示を發出、海軍では1944年7月21日に特殊奇襲(特攻)兵器採用を含む大海指が発せられ、陸海軍共に、統率の外道と称される特攻が動き始めたのである。

- \* 自発的自己犠牲ではない組織的「特攻」は避け得なかったのだろうか？6,418名の特攻により国に殉じた英霊は家族や故郷を思う純粋な気持ちで散華したのは事実だが・・・  
(了)